研究ノート

在日留学生の社会ネットワークに関する研究の概観

Research Overview of Social Networks of International Students Studying in Japan

国際戦略推進機構・半沢　千絵美

キーワード：留学生、社会ネットワーク、社会ネットワーク分析、人間関係

外国語キーワード：International Students, Social Network, Social Network Analysis, Interpersonal Relationship

要旨
日本の大学への留学の目的や形態が多様化している現在、留学生の生活様式や他者との関わり方もさまざまであると想像できる。本稿では、日本で学ぶ留学生の他者との関係を「社会ネットワーク（Social Network）」と捉え、留学生がどのような社会ネットワークを構築しているのかを調査したこれまでの研究を概観する。在日留学生の社会ネットワークに関する研究は、これまでさまざまな研究が横断的・縦断的に行われているが、研究目的や手法が多岐にわたっており、在日留学生の社会ネットワークの特徴について明らかになっていることは多くない。また、これまでの研究には、在日留学生の社会ネットワークと言語使用や目標言語の習得を関連づけた研究はほとんどない。在日留学生の日本語および母語の使用には個人の持つ社会ネットワークが影響すると考えられることから、留学生個人の社会ネットワーク構築のプロセスに着目し、言語使用にも関連づけた研究の蓄積が望まれる。

Because the purposes and modalities of studying abroad in Japan are diversifying, the lifestyles of international students and how they interact with others are also changing. This study examines the interpersonal relationships of international students living in Japan as a “social network” and outlines the existing research on international students’ social network formation. Different types of cross-sectional and longitudinal studies have analyzed the social networks of international students studying in Japan, but there is no consensus yet on how international students develop their social networks. In addition, few studies have linked international students’ social networks with language use and target language acquisition. Further research is needed to explore international students’ social network formation process in connection with their language use, as it is expected that L1 and L2 use are influenced by international students’ social networks.

1.　はじめに

留学する国や地域に関わらず、大学生や大学院生が海外留学をする目的はさまざまで、そのさまざまな目的に対応するかのように、留学の形態も多様化している。日本の大学でも、これまで実施されてきた学部留学や交換留学だけではなく、数週間の短期留学や、英語で学位を取得するプログラム等、留学前、または留学期間中に目標言語を学ぶことが想定されていないものも実施されてきている。来日した留学生は、それぞれの目的を達成するために学び、日本で生活するわけであるが、彼らが来日後に構築する人間関係も多様なものであると想像できる。

留学生は日本人学生と大学のキャンパスという場を共にしているが、日本人と友人関係を作れない、交流する機会がないという声は長年留学生から聞かれる悩みである。日本学生支援機構が実施した「令和 3 年度私費外国人留学生生活実態調査[1]」によると、「留学してよかった」と回答した 6,988 名の留学生のうち、「留学してよかったこと」に「日本人の友人ができたこと」を選んだ留学生は 33.8%で、「国際的な人脈ができた」を選んだ留学生は 29.1%であった。コロナ禍前の令和元年度の同調査[2]では、「日本人の友人ができたこと」を選んだ留学生は 36.6%で、「国際的な人脈ができた」を選んだ留学生が 32.7%であったことから、コロナ禍による影響も否定できないが、留学中に日本人や他国の留学生との関係が構築できている留学生は多くないことがわかる。

英語での学位取得や、専門的な研究活動が主な目的である等、留学目的によっては、積極的に日本人との交流や日本語の習得を望まない留学生もいると思われるが、留学中の人間関係は留学生のライフスタイル、支援の受け方、そして言語使用にも大きく関わると考えられ、それは、留学への満足度にも影響するであろう。したがって、受け入れ側が、留学生が日本でどのような人間関係を構築するのかを知り、それを踏まえて制度や環境を整えることは重要な課題である。本稿では、在日留学生の人間関係を「社会ネットワーク（Social Network）」として捉え、留学生がどのように社会ネットワークを構築し、それを展開させるのかについて、これまでの研究を概観し、今後の研究の展望についても議論する。

---

[1] 令和 3 年度私費外国人留学生生活実態調査（https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/seikatsu/data/2021.html）2023 年 3 月 10 日参照

[2] 令和元年度私費外国人留学生生活実態調査（https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/seikatsu/data/2019.html）2023 年 3 月 10 日参照

2.　在日留学生の社会ネットワーク

本稿における社会ネットワーク（Social Network）とは、社会ネットワーク分析（Social Network Analysis）に基づくものである。社会ネットワーク分析とは、行為者間の関係の構造を解明し、その構造が行為者の行為や信念にどのように影響を与えているかを分析する手法で、社会ネットワークの構造環境が、個人の行為に機会を与えるもの、もしくは拘束するものという理論が根底にある。また、行為者間の関係の種類は様々で、生物学上の関係、公式的な関係、ある人の他者からの評価（友情等）、行動上の相互行為、参加や所属等などが一例である（ワッサーマン・ファウスト 1994）。在日留学生の文脈においては、留学生の他者との関係性の構造を明らかにし、その関係性の構造が留学生の行為や信念にどう影響を与えているのかを考察することができるが、どのような関係性に着目するかは研究の目的によって異なる。

社会ネットワーク分析には、特定のコミュニティやグループ全体のネットワークを分析対象とするソシオセントリックネットワーク分析（Sociocentric Network Analysis）と、特定の個人をとりまくネットワークを分析対象とするエゴセントリックネットワーク分析（Egocentric Network Analysis）がある。データを数値化して分析が可能な点と、グラフと呼ばれる図を用いて人物間の関係性を可視化できることも特徴の一つである。

これまでの在日留学生を対象とした研究では、社会ネットワーク分析の手法を用いて留学生個人の持つ人間関係を分析した事例がほとんどないため、在日留学生の「ネットワーク」「人間関係」「対人関係」「友人形成」等のキーワードをもとに関連分野の先行研究を概観する。

3.　在日留学生の社会ネットワークに関する研究

3-1.　在日留学生の社会ネットワークを対象とした研究

これまでの在日留学生の社会ネットワークを対象とした研究の多くは、Bochner, McLeod, & Lin（1977）の提唱した「機能モデル（Functional Model）」を参照して、留学生の人間関係の特徴について論じているものが多い。Bochner et al.（1977）は、ハワイ大学に留学中の大学院留学生 30 名を対象に行った調査の結果から、留学先における友人ネットワークは、留学生と同じ国（同国）出身の人物との間、留学先の国（ホスト国）の人物との間、そして、それ以外の国（他国）出身の人物との間の 3 種類に分けられ、それらの友人関係にはそれぞれ異なる機能があると述べている。具体的には、同国の友人とは自文化を共有する機能、ホスト国の友人とは言語や学習の支援を得る等学術的な機能、他国の友人とは娯楽を共にするという機能である。さらに、Bochner et al.（1977）は、3 つのグループの中で、

留学生がもっとも親密に感じていたのは同国の友人であるという結果も報告している。

以下の表 1 は、機能モデルを参照した在日留学生の社会ネットワークに関する研究例をまとめたものである。

表 1　機能モデルを参照した在日留学生のネットワークに関する研究例

	研究目的	ネットワークの名称	調査対象者	調査方法
横田・田中（1992）	留学生の友人ネットワークを居住形態の違いもとに比較	フレンドシップ・ネットワーク	留学生 273 名	質問紙調査
田中（2000）	留学生のソーシャル・サポート・ネットワークの構造を調査	ソーシャル・サポート・ネットワーク	留学生 237 名	質問紙調査
村上（2005）	アメリカ人短期留学生のソーシャル・ネットワークとホストとの親密化を調査	ソーシャル・ネットワーク	アメリカ人短期留学生 7 名	質問紙およびインタビュー調査
貫田・ウリガ（2013）	留学生を高社交群と低社交群に分け、友人関係の構成や共有する話題を比較	交友ネットワーク	留学生 254 名	質問紙調査
呉（2017）	中国人留学生の友人関係に関連する要因を調査	友人関係[3]	中国人留学生 95 名	質問紙調査

横田・田中（1992）は国立大学に在籍する留学生 273 名に、友人ネットワークに関する質問紙調査を実施し、機能モデルを参照し分析を行っている。その結果、友人として選ばれた人物は同国の人物がもっとも多く 41%を占め、次にホスト国（日本）が 31%、もっとも少ないのが他国の人物で 28%という結果が示された。横田・田中（1992）は海外で実施された先行研究と比較し、日本在住の留学生においては、友人形成のプロセスにおいて他国の人物が選ばれにくいのではないかと考察している。機能別の結果としては、Bochner et al.（1977）では、他国の友人が占める割合が高かった「娯楽を共にする」という機能に、同国人が占める割合が高かったということが特徴的である。

田中（2000）は、留学生に対する周囲の人からの援助を「ソーシャル・サポート」とし、国立大学に在籍する留学生 237 名に実施した調査の中で、ソーシャル・サポート・ネットワークの構成メンバーに関する質問をしている。具体的には、留学生に「日本で大切な関わりがある人」を最大 10 名挙げてもらい、その人物を日本人、同国人、他の外国人に分類している。その結果、ソーシャル・サポート・ネットワークの構成メンバーは、日本人が 53.4%、同国人が 33.0%、他の外国人が 13.6%であったと報告している。この結果は、横田・

[3] 呉（2017）は Bochner et al.（1977）を参照して質問紙の質問項目を作成しているが、「ネットワーク」という表現は用いていない。

田中（1992）の結果と傾向が異なるが、比較する際には横田・田中（1992）が指示した「友人」と田中（2000）が指示した「大切な関わりがある人」は留学生にとって意味が異なることに留意しなければならない。実際に田中（2000）の「大切な関わりがある人」には「指導教官」や「同じ研究室の学生」「他の教職員」等友人ではない人物が含まれており、それらの人物とは必ずしも親密な関係ではないことも推測される。

貫田・ウリガ（2013）は、在日留学生 254 名のうち、友達との付き合いに「とても力を入れている」と回答した留学生（41.0%）を社交性の高い「高社交群」、「少し力を入れている」「あまり力を入れていない」「全く力を入れていない」と回答した留学生（59.0%）を「低社交群」と位置づけ、それぞれ「高社交群」と「低社交群」に属する留学生の友人ネットワーク[4]について機能モデルを参照して比較している。その結果、高社交群は低社交群よりも、友人数の合計数と他国出身の友人数が有意に多いという結果が示されたが、日本人の友人の数に有意な差はみられなかったと報告している。交流の質に関しては、高社交群も低社交群も、同国出身の友人のほうが親密な関係を築きやすいということが示唆された。

横田・田中（1992）、田中（2000）、貫田・ウリガ（2013）は、いずれも質問紙調査によって量的な分析を行なっているが、インタビュー調査を実施し質的な分析を行なっているものや、縦断的な研究を行なっている研究もある。

村上（2005）は、アメリカ人留学生の「ソーシャル・ネットワーク」を、学外の人物も含めて調査し、ネットワークを構成する人物の国籍や留学生の居住形態との関連について分析を行っている。調査方法としては、日本語レベルが初級のアメリカ人留学生 7 名を対象に、田中（2000）で用いられていた質問紙調査とインタビューを実施している。質問紙調査の結果から、田中（2000）の結果と同様に、ホスト国（日本）の人物が、留学生のソーシャル・ネットワークを構成する主なメンバー（50.9%）であることが明らかになったが、関係の満足度という観点では同国（アメリカ）の人物のほうが数値が高かったことを報告している。日本人との関係については、ホストファミリーや学内の支援制度で知り合った支援者等、接触頻度が高い人物と親密になる可能性が高いと結論づけている。

高井（1994）は、国立大学で学ぶ留学生に来日後 2 ヶ月目と 9 ヶ月目に同じ質問紙調査を実施し、得られた 25 名からの回答を分析している。日本語能力、社会的スキル、ソーシャル・サポート、日本人の留学生に対する態度についての質問をしているが、ソーシャル・サポートについては、時間の経過とともに同国出身者からのサポートが全体的に減少し、他国出身者からの「道具的サポート[5]」と日本人からの「情緒的サポート」および「話相手

[4] 貫田・ウリガ（2013）は「交友ネットワーク」という表現を用いている。

[5] 高井（1994）が参照している House（1981）によると、「道具的サポート（instrumental support）」とは、他者のために時間やお金を使う等直接的な形のサポートを指し、「情緒的サポート（emotional support）」とは信頼や愛情、共感からなるサポートを指す。

としてのサポート」が増加傾向にあることが明らかになった。高井（1994）はソーシャル・サポートを調査の対象としているため、これが留学生の社会ネットワーク全体を反映する結果ではないと思われるが、ソーシャル・サポート･ネットワークの変化は、留学生の社会ネットワークそのものの変化にも共通する点があると考えられる。

武田（2002）と朴（2004）は、「あるプロセスの参加者がどのように配置され、どのように関わり合っているか」というネウストプニー（1997）の「ネットワーク」の定義を用い、留学生の他者との関わりについて調査している。武田（2002）は、海外の S 大学から C 大学に留学をしている 3 名の短期留学生に、約 3 ヶ月間の間に 3 回インタビューを行い、留学生が一日の中でどのような行動をし、誰とコミュニケーションを取っていたかを分析している。抽出されたネットワークは、S 大学からの留学仲間を指す「大学ネットワーク」、C 大学の「中国人留学生ネットワーク」、S 大学以外から C 大学の短期留学プログラムに参加している留学生を指す「短期留学生ネットワーク」、「アルバイトネットワーク」、C 大学の「日本人学生ネットワーク」、C 大学から S 大学にかつて留学していた「元交換留学生ネットワーク」、さまざまな身分で C 大学に留学している「留学生ネットワーク」、3 名各自に割り当てられている日本人学生を指す「チューター・ネットワーク」の 8 つであるが、3 名に共通して認められたのは、「大学ネットワーク」「短期留学生ネットワーク」「留学生ネットワーク」「チューターネットワーク」の 4 つである。その中で特に継続的で強い結びつきが報告されたのが、S 大学からの留学生による「大学ネットワーク」で、その傾向は 3 名に共通するものであった。しかし、3 名のネットワークは 3 ヶ月の間に変化し、日本人学生とのつながりを持ち始める者や、アルバイト先で日本人や外国人とのネットワークが形成されたりと、時間の経過とともにネットワークの広がりが見られるようになったと報告している。

朴（2004）は、短期留学生の来日直後からのネットワークの形成と変化について、中国、韓国、台湾の 3 名の留学生のインタビューデータをもとに分析を試みている。留学生のネットワークは、大きく学校、家、アルバイト先、公的な場（区や市など公的機関が運営する場）、公共の場（コンビニ、スーパー、デパートなど）、趣味の場に分けられると想定し、それらをさらに詳細に分類している。インタビューの結果から、留学生 3 名のネットワークの特徴はそれぞれ異なっていることが明らかになったが、ネットワーク形成の主要な場は大学であり、学外のネットワークの必要性に対する意識が薄いとしている。また、学習を、知識や技能の獲得ではなく、周囲の状況との関わりの中から生じるものであるとする「状況的学習論（situated learning）」の枠組みを援用し、ネットワークの形成を「共同体への参加プロセス」として捉えていることが本研究の特徴でもある。留学生は共同体、つまり、コミュニティの一員として認知されることを願い活動しているわけであるが、その過程で価値観の変化が認められたと報告している。

これまでの研究を概観すると、在日留学生の社会ネットワークに関する研究は、Bochner et al.（1977）の提唱する機能モデルに影響を受け、発展してきたと言える。しかし、留学生の社会ネットワークは、機能モデルが示すような単純なものではないことも明らかになってきた。例えば、工藤（2003）は、親しい友人関係には、文化的差異に関わらず多重的な機能があるのではないかと指摘しているが、貫田・ウリガ（2013）の研究でも同様の結果が得られている。また、インタビューデータの質的な分析や、社会ネットワークの変化に着目した縦断的な研究も増えつつあるが、さらなる研究結果の蓄積が必要ではないだろうか。

3-2.　在日留学生の社会ネットワークに影響を与える要因

在日留学生の社会ネットワークに影響を与える要因として、これまでの研究結果から示唆されているものに、留学生の出身地（国･地域）がある。

田中ら（1990）は 237 名の留学生に実施した質問紙調査の結果から、留学生が「大切な関わりがある人」として挙げた人物を日本人、同国人、他の外国人に分類しているが、留学生の国籍別の結果もまとめている。全体的な結果では、「大切な関わりがある人」の日本人の割合は 52.9％であったが、留学生の国籍別に見たところ、中国人と「欧米加豪」の留学生の「大切な関わりがある人」の日本人の占める割合が高く、それぞれ 60.3%、61.5％であった。また、横田・田中（1992）でも、「西洋グループ」としてまとめられている欧米、カナダ、オセアニアの留学生が、自文化の共有、勉強、娯楽のいずれにおいても、日本人を友人として選んでいるケースがもっとも多いことが示されたが、中国人留学生に関しては田中ら（1990）とは異なる結果が示されている。横田・田中（1992）は、中国出身の留学生は機能モデルのいずれの機能においても、同国人とのつながりがもっとも強かったと報告している。中国人留学生同士のつながりの強さに関しては、中国人留学生を対象として、友人関係に影響する要因を調査した呉（2017）でも報告されている。

田中ら（1990）と呉（2017）では留学生の社会ネットワークと性別との関連についても分析が行われている。田中ら（1990）の調査結果では、男性の留学生は、「大切な関わりがある人」に男性を選ぶ割合が高い（74.1%）のに対し、女性の留学生が選ぶ「大切な関わりがある人」の性別は男性が 53.2%、女性が 46.8％と、おおよそ同じ割合となった。一方、呉（2017）は、男性よりも女性のほうが中国人留学生同士と親密な関係を築く傾向がみられたと報告しており、留学生の社会ネットワークの構築には何らかの性別の影響の可能性がうかがえる。

横田・田中（1992）は居住形態による友人関係の特徴についても分析を行っている。留学生の居住形態を、日本人学生も居住する大学寮、留学生会館、アパートの 3 つに分けて、留学生の友人の構成を分析している。機能モデルを用いた分析結果からは、大学寮に住む留学生は、いずれの機能においても友人として日本人を選ぶ割合がもっとも高かったが、

アパートに住む留学生は、いずれの機能においても同国人の友人を選ぶ割合がもっとも高いという結果となった。これは、日本人との接触量が居住形態によって異なり、それが友人関係の形成にも影響していることのあらわれである。呉（2017）は、居住形態をアパートか、大学寮や留学生会館の 2 つに分けて中国人留学生の友人関係を分析しているが、大学寮や留学生会館に住む留学生のほうが他国の留学生との「レクリエーション・異文化理解」面における関係性が強いことを示している。他にも、居住形態と社会ネットワークの関連については、村上（2005）が考察している。村上（2005）の調査対象の留学生の居住形態は、ホームステイと寮であったが、ホームステイをしている留学生は寮に住む留学生と比べて、ネットワークのメンバーとして挙げた日本人の人数が多いとし、居住形態の特徴がネットワークの構成メンバーに影響していると述べている。

3-3.　在日留学生の社会ネットワークと言語使用

在日留学生の社会ネットワークと言語使用についての研究は数が限られているが、以下のような研究事例がある。

日本語レベルと社会ネットワークとの関連については、横田・田中（1992）が量的な分析を行っている。横田・田中（1992）は前述の留学生 273 名の友人関係のデータを日本語レベル別（初級・中級・上級）に分析しており、友人の中の日本人の割合が、日本語が初級レベルの留学生では 22％であるのに対し、中級・上級では 33%と高くなっていることを示している。これは、日本語のレベルが高くなるにつれ、意思疎通できる日本人が増えることを考えると妥当な結果であるが、中級レベルと上級レベルに違いがみられない要因についても探る必要がある。呉（2017）は日本語に加え、中国人留学生の英語能力と友人関係についても分析を行なっている。その結果、中国人留学生の日本語能力と日本人学生とのつきあい、および、英語能力と中国以外の国からの留学生とのつきあいに弱い正の相関があったことを報告している。

貫田・ウリガ（2013）の調査結果でも、社会ネットワークと言語使用についての結果が報告されている。貫田・ウリガ（2013）は友達との付き合いに「とても力を入れている」かそうではないかで、高社交群と低社交群に留学生を分けているが、高社交群と低社交群には日本語の使用率に有意な差はみられなかったと報告している。一方、英語の使用比率については差がみられ、高社交群のほうが英語の使用比率が高いことが明らかになっている。これは、貫田・ウリガ（2013）による、高社交群のほうが他国出身の友人数が多いという結果と合致している。

留学生の社会ネットワークを言語習得の観点から分析した研究には、Dewey, Bown, & Eggett（2012）がある。日本への留学経験者を対象に、日本での留学経験をふりかえるという形で、日本語口頭能力の自己評価および言語使用と社会ネットワークについてのアンケートを実施し、204 名分の回答を収集している。その結果、日本語の口頭能力の発達に影

響していた要因の一つとして、学習者が所属していたグループや組織の数を挙げ、社会ネットワークと言語習得の関連性についてその可能性を示唆している。また、日本語母語話者との接触時間も日本語の口頭能力の発達と関連しているという結果を示唆しており、Dewey et al.（2012）は、留学中の日本語母語話者との接触が言語習得に与える影響に肯定的である。

留学生の社会ネットワークと言語使用に着目し、縦断的にデータを集めているのは、伴・宮崎・スルヤディムリア（1997）と Umino & Benson（2016）による研究である。伴ら（1997）は、日本語が初級レベルから中級レベルの 10 名のインドネシア人留学生を対象に、留学生のインターアクション行動とネットワークを調査している。その方法は、就寝までの 1 時間ごとのインターアクション行動、つまり、日本人との接触場面において、誰と、どこで、どのようなやりとりを、何語で行なったかを詳しく記述してもらうというもので、1 ヶ月間の変化を分析している。その結果、日本語能力の高い留学生のほうが日本語のインターアクションの種類の増加率が高いだけでなく、日本人とのネットワークが広く、日本人との接触の時間も長かったことを報告している。しかし、伴ら（1997）が対象とした留学生の接触場面に登場する日本人には日本語教師が多く、教師以外の人物とのインターアクションの機会は日本語レベルが高い学生でも少なかったことが報告されている。

Umino & Benson（2016）は、日本語によるインターアクションと実践共同体（community of practice）への参加機会という点に着目して、在日インドネシア人留学生である Iwan の 4 年間の留学経験を分析している。実践共同体の概念においては、「学習主体が実践共同体（communities of practice）の正式メンバーとして実際の活動に参加し、そこへの参加の形態を徐々に変化させながら、より深く実践共同体の活動に関与するようになる過程全体」（西口 2003, p.7）が「学習」であると考えられている。Umino & Benson（2016）は、学習主体である Iwan の、彼を取り巻くコミュニティへの参加の過程や、それに伴う日本語の使用の変化に着目しており、Iwan の過去の経験の語りを引き出すために、本人から提供された写真の分類作業を経て（photo-elicitation）インタビューを実施している。写真とインタビューデータの分析から、Iwan は、留学 1 年目には大学で組織されたイベント等を通してコミュニティへの参加を試みていたが、4 年目になると身近な日本人とも同等の関係性を築いており、それに伴い日本語の使用機会も増えていったことを描写している。また、写真に映る人物から、Iwan が構築していた人間関係の変化も読み取れ、4 年間の間に写真に写る日本人の割合が増え、留学生の割合が減少していることを示している。Umino & Benson（2016）は、直接留学生の言語行動を分析した研究ではないが、社会ネットワークの変化が誰と、何語で交流するかに関連していることを示しており、社会ネットワークと言語使用の関係性を紐解く手がかりとなる。

4. 在日留学生の社会ネットワーク：今後の研究に向けて

これまでの在日留学生の社会ネットワークに関する研究を概観した上で、今後の研究として以下の点に留意した研究が有益であると考える。

まずは、調査方法に関する点である。これまでの在日留学生の社会ネットワークに関する研究は、留学生のソーシャル・サポート・ネットワーク、友人関係、コミュニティへの参加、社会ネットワークの変化等、さまざまな着眼点から研究が行われている。これらの研究は、データ収集の手法が異なるだけではなく、留学生個人につながる人物をどのように抽出したのかも異なっている。「大切な関わりがある人（田中 2000、田中ら 1990）」「友人（横田・田中 1992）」「授業以外の場でよく会う友人（貫田・ウリガ 2013）」「もっとも仲の良い友人（呉 2017）」と、指示を与えて留学生に報告させている研究もあれば、インタビュー調査から留学生の社会ネットワークや、ネットワークを構成する人物を明らかにしている研究もある（武田 2002、朴 2004）。これらの手法はいずれもそれぞれの研究目的に沿ったものではあると思われるが、特に質問紙調査の場合は、留学生が人物を特定する際に調査者との理解に相違がないか注意しなければならない。他にも、調査方法に関連して、回答する上で人数の上限を設定している（田中 2000、田中ら 1990、横田・田中 1992）場合があることにも留意しなければならない。上限を設定することで、留学生の社会ネットワークの全容を解明することを妨げている可能性も否定できないからである。

次に、これまでの研究結果をみると、Bochner et al.（1977）が提唱している機能モデルは、留学生の友人関係の傾向を単純化しているものであり、実際はより複雑であることが示唆された。そして現在は、SNS やオンラインツールの発達により他者とのコミュニケーションの方法にも選択肢が増え、留学生の他者とのつながり方も益々多様化している。このような状況を踏まえると、今後必要になってくるのは、留学生の社会ネットワークを国籍等の属性を基準に量的に分析するだけではなく、留学生個人の社会ネットワークの全容に着目する研究や、社会ネットワーク構築のプロセスに焦点を当てた研究であると考える。

他にも、留学プログラムの多様化や、留学生と日本人学生の接触機会を増やそうとする大学の試み等、留学環境の変化にも対応していく必要がある。例えば、山川（2013）は、留学生と日本人学生が共同で生活する混合寮において、どのような要因が友人関係の構築に貢献しているかを調査しているが、混合寮が与える留学生の社会ネットワークへの影響について調査することは、今後の留学生の受け入れ方法にも直接示唆を与えるものであり、同様の研究の蓄積が望まれる。

最後に、社会ネットワークと言語使用の関連も今後の研究が望まれる分野である。これまでの留学研究では、留学をすることが目標言語の習得を意味するものではないということは既に指摘されているが、目標言語の使用があったとしてもそれは同様で、習得につながるということは実証されてはいない（Dewey et al. 2012）。しかしながら、在日留学生が

日本語を使用する機会は他者とのやりとりから生み出され、誰と、何語で、どのぐらいの頻度でどのようなやりとりがなされるのかは、留学生の社会ネットワークが何らかの影響を与えるはずである。留学生が築く社会ネットワークが日本語の使用を促すものであれば、それが言語習得を促す直接の要因にはならなくとも、妨げるものであるとは考えにくい。今後の留学生の社会ネットワークに焦点を当てた研究では、留学生の社会ネットワークが言語使用にどう影響を与えているのか、社会ネットワークの構築や変化のプロセスに焦点を当てつつ分析する必要があるのではないだろうか。

Umino & Benson（2016）は、コミュニティへの参加の機会や方法の変化に伴う、留学生 Iwan の日本語のインターアクションの変化を記述しているが、Iwan をとりまく社会ネットワークの構造自体を明らかにしたものではない。そのような社会ネットワークの構造や変化を明らかにするためには、社会ネットワーク分析を用いることができる。Hasegawa（2019）は、夏期日本語コースに参加するために日本に短期留学している留学生の社会ネットワークを、前述したソシオセントリックネットワーク分析を用いて分析している。3 つの異なる留学プログラムでデータを収集し、留学プログラムの特徴がプログラム内の社会ネットワークにどう影響しているかを分析しているが、社会ネットワーク分析の手法を用いることで、留学生の人間関係を可視化してそれらの特徴を比較している。

多様化する留学プログラム、そして複雑化する社会の中で、留学生個人の国籍、性別、母語といった属性や日本語レベルからだけでは留学生の日本での経験を予測することは難しい。社会ネットワーク分析はそのような属性に関わらず、人と人とのつながりを解明する手法であるという点で、今後活用が期待される。三代（2009）は、留学生活と日本語教育について以下のように述べているが、社会ネットワーク分析は、「学びのプロセス」を明らかにする手助けになりうると考える。

> 留学生活の中で留学生が関係を持ちたい具体的な他者と関係を持つこと、参加したい具体的な共同体に参加すること自体の過程全体が学びとして捉えられる。その時、留学生活と日本語教育は原因と結果の関係でなく、一つの大きな学びのプロセスとして考えられるのである。（三代 2009, p.31）

留学生が日本で誰とつながり、どのような社会ネットワークを構築し、展開させるのか、さまざまなケースの分析を蓄積していくことが、日本語教育の場面だけではなく、日本の大学における留学プログラムのあり方についても議論をするきっかけとなるのではないだろうか。

参考文献

伴紀子・宮崎里司・スルヤディムリア，アグス(1997)「インドネシア人日本語学習者のインターアクション行動−学習ストラテジーの観点より−」『アカデミア文学・語学編』63, 33-43.

Bochner, S., McLeod, B. M., & Lin, A. (1977). Friendship patterns of overseas students: A functional model. *International journal of psychology,* 12, 277-294.

Dewey, D.P., Bown, J., & Eggett, D. (2012). Japanese language proficiency, social networking, and language use during study aboard: Learners' perspectives. *The Canadian modern language review*, 68, 2, 111-137.

Hasegawa, A. (2019). *The social lives of study abroad: Understanding second language learners' experience through social network analysis and conversation analysis*, New York: Routledge.

House, J.(1981). *Work stress and social support*, Reading, Massachusetts: Addison-Wesley Publishing Company.

工藤和宏(2003)「友人ネットワークの機能モデル再考−在豪日本人留学生の事例研究から−」『異文化間教育』18, 95-108.

三代純平(2009)「留学生活を支えるための日本語教育とその研究の課題：社会構成主義からの示唆」『言語文化教育研究』8, 1, 1-41.

村上律子(2005)「アメリカ人留学生のソーシャル・ネットワークとホストの親密化−支援制度による接触を中心に−」サウクエン・ファン･遠山千佳・徳永あかね・堀内みね子・村上律子『外語大における多文化共生：留学生支援の実践研究』http://www2.kuis.ac.jp/icci/publications/pj_results/ssp.htm〈2023 年 2 月 10 日アクセス〉

ネウストプニー, J.V.(1997)「日本語教育とネットワークの考え方−ネットワーク研究のためのガイド−」『国内の日本語教育ネットワーク作りに関する調査研究−最終報告書−』日本語教育学会, 181-196.

西口光一(2003)「日本語教育と状況的学習論」『日本語・日本語教育を研究する』21, pp.6-8.

貫田優子・ウリガ(2013)「在日外国人留学生の社交性と交友ネットワーク：大阪大学・京都大学の外国人留学生を対象としたアンケート調査から」『日本語・日本文化』39, 1-23.

朴金秋(2004)「状況的学習論から見る東アジア留学生のネットワークの構築−短期留学生 3 名に対する縦断的調査をもとに−」『留学生教育』9, 127-140.

高井次郎(1994)「日本人との交流と在日留学生の異文化適応」『異文化間教育』8, 106-116.

武田加奈子(2002)「短期留学生のネットワーク調査：言語管理プロセスの観点から−中間報告」千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書第 38 集「接触場面における言語管理プロセスについて（Ⅱ）」村岡英裕編, 71-85.

田中共子(2000)『留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル』ナカニシヤ出版

田中共子・高井次郎・神山貴弥・村中千穂・藤原武弘(1990)「在日外国人留学生の適応に関する研究(1)−異文化適応尺度の因子構造の検討−」『広島大学総合科学部紀要Ⅲ』14, 77-94.

Umino, T., & Benson, P. (2016). Communities of practice in study abroad: A four-year study of an Indonesian student's experience in Japan, *The modern language journal*, 100, 4, 757-774.

ワッサーマン，スタンリー・ファウスト，キャサリン(1994)『社会ネットワーク分析 :「つながり」を研究する方法と応用』（平松闊・宮垣元訳）ミネルヴァ書房
呉暁良(2017)「在日中国人留学生の友人関係とその関連要因：九州大学在学生を事例に」『地球社会統合科学研究』7, 35-44.
山川史(2013)「寮に住む留学生と日本人学生の友人関係構築に関する事例研究」『異文化間教育研究』38, 100-115.
横田雅弘・田中共子(1992)「在日留学生のフレンドシップ・ネットワーク−居住形態（留学生会館・寮・アパート）による比較−」『学生相談研究』13, 1, 1-8.